

---

# Love is People

スチュアート

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

L o v e i s P e o p l e

### 【Nコード】

N 6 6 8 1 B

### 【作者名】

スチュアート

### 【あらすじ】

高校入学引越し同棲んなベタな！一人暮らしをする事になった  
岸崎耕太きしなきこうたの身に起こったほのぼの？ラブストーリーー

ただいま全編改訂中

## ブローグ

ジリリリリリリリリリリリリリリリ！！

枕元で、今時珍しいベル型の目覚まし時計がけたたましい音を立てる  
睡眠の心地よい感覚から無理やりに引き上げられ、これ以上なく不  
機嫌顔だろう表情で目を開け、自分をそうした元凶である目覚まし  
時計を見る

まったく毎日毎日そうやって人の睡眠を邪魔をする生活でイヤにな  
らないのかコイツは

寝起きのぼけた思考でそんなことを考えつつ目覚まし時計を止めた

そうやって目を覚まし布団から起き上がった俺の名前は「岸崎耕太」  
(きしざき こうた)

七月二十五日生まれ獅子座、好きな食べ物は辛子明太子とイカの塩  
辛、嫌いな食べ物チョコレートケーキな普通の男子中学生、もとい、  
中学を卒業して来月から高校生だ

「ふぁ・・・朝か」

目をこすりながら布団から起き上り服を着替え始める  
着替えながらなんとなく自分の部屋を見回すと、そこはつい先日ま  
でおいてあったタンスや机、コンポやなんかの家具がいつさい無い  
それを見てあらためて自分が今日この家を出ることを実感する。

来月からこの町から離れたところにある吉野浦大学付属高校に向こ  
うで一人暮らしをしながら通うことになっていて、荷物はもう向こ  
うに送ってあるためここにはもうほとんど何も残っていない。

コンコン

着替えをすませ、残った服なんかを鞆に詰め込んでいる時に部屋の扉がノックされた

「どうぞ〜」

と、一応言っがこの家には俺を除けば一人しかいないわけで

「準備はできたか？」

扉を開けて入ってくるのは当然親父でしかあり得ない

一応親父の紹介もしておこう

名前は耕助うらへお分かりかと思うが俺の名前は親父から一文字もらってつけられたものだ

歳は35、逆算すればわかるが20になる前に俺をお袋に仕込んだことになる

いくらなんでも早すぎやしないかと思ったが本人は一切後悔していないそうので俺がなにか言うことでもないだろう

母とは高校で知り合って、母が高校を卒業してすぐに一緒になったそうだ

母は俺が生まれてすぐに事故で死んでしまったので俺はよく覚えていないが、写真で見た限りは美人だった

親父曰く性格も良妻賢母で文句のつけようもない女性だったそうだが親父のほうは、外見はまあ年齢相当である、間違っっても20に見えろとかそんな漫画のような外見ではない

が、まあ息子の俺が言っのもなんだが いい男である、ナイスミドルといった感じだ

会社でもモテるらしい、確かにバレンタインなんかには結構チョコ

を貰ってきたりする（社交辞令も多いと思うが）

会社と言えば親父の仕事はインテリアコーディネーターである  
インテリアコーディネーターとは家を建てたり改築したりする際に、  
家具やカーテン、照明などの商品選びや住宅計画の提案を行う仕事  
である

まあこれを語ってもしょうがないので痕は省略する

親父が勤める会社は建築関係を幅広くやっている会社で、テレビで  
もたまにCMを見かけたりするくらいには有名な会社だ  
いい会社に勤めているだけあってお金にはまあ困っていない  
しかし、いかんせんこの親父家事が全く出来ない。

やるやらないの問題ではなく、完膚なきまでに出来ないのだ。  
料理も掃除も洗濯もできない。俺が9歳くらいの頃、風邪をひいた  
俺のためにお粥を作ろうとしてくれたことがあるのだが  
どうやったのか台所が爆発した。

漫画のような話だが事実起こってしまったのだからしょうがない  
それから俺が家事を担当してきた、そのこと自体に不満はないが  
俺が出て行ってこれから親父が一人でやっていけるのか心配ではあ  
る。

「準備はできているな、そろそろ行くぞ」

「ああ、分かった」

親父の言葉に答えつつ、最後に残した少量の服や、今日俺をたたき  
起してくれた目覚まし時計を詰め込んだ小さなカバンを持って立ち  
上がる

最後に今まで暮っていた部屋を一度だけ振り返ってから、おやじに  
つづいて家を出た

駅に向かう親父の車の中で親父から向こうの話を聞きながら俺は柄

にもなくワクワクしていた、何しろ一人暮らしだ、それに親父によるとこれから住むところは一昨年作られたばかりのまだ新しいマンションでバス、トイレ付きの3LDKというすばらしい部屋だそう  
だ、これで期待せずにいられようか。

そんな風に期待に胸を膨らませて到着した駅のホームで向かい合い言葉を交わす

「じゃあ、親父元気で」

軽く言ってみると

「おまえも元気でな、風邪とかひかないようにしろよ、ちゃんと野菜とかもたべるんだぞ」

いかにも親らしい言葉が返ってきた

「そのまま親父に返すよ・・・じゃあそろそろ行くかな」

間もなく発車するというアナウンスを聞き、鞆を持ち列車にむかう「寂しくなったら帰ってきてもいいんだからな」

なんて親父が言って手を振っていたのでこちらも手を振りかえしながら「ハイハイ」と軽く言って列車に乗り込んだ。

「まあ・・・寂しいなんてことはあり得ないけどな」

と走り去る電車を見送り車に戻る父が意味深なことを呟いていたことを耕太は知る由もなかった

## プロローグ（後書き）

読んでいただいております、読みづらい文章でごめんなさい。

初めてかいたのですが、ボロボロですグダグダです、つくづく他の小説家の方々のすごさを痛感してますw（o（wガーン、こんなダメ作者ですがこれからがんばっていきますのでよろしければこのさきもよろしく願ひいたします m（―（ m

## 第1話

親父の怪しいつぶやきなど露知らず、耕太が期待に胸を膨らませのんびりとした電車の旅を終え、自分がこれから住む街にたどり着いた頃にはもう日は暮れかけ、きれいな夕焼けが駅のホームから見えていた。

「着いた」

駅のホームでこりかたまつた肩をまわしながら耕太が言った。

「半日くらい電車の中にいたからな、さて確かマンションまでは親父の地図どおりに行けば10分くらいで着くって話だったけど」

鞆のサイドポケットから折り畳まれた紙を取りだし駅を出た。

〽10分後〽

耕太は10階建ての真新しいマンションの前に立っていた。親父の地図がメチャクチャで道に迷って美少女に助けてもらったり、曲がり角で勝気な女の子とぶつかって言い争うこともなく、本当に何もなくて目的地に到着した……。べつに期待していたわけじゃないけどさ、ちよつとくらい夢見てもいいじゃない!!

「さて、まずは管理人さんに挨拶かな？」

耕太は身なりを正しマンションに足を踏み入れると入ってすぐのオートロックから管理人室の番号を探しインターホンを鳴らした、すると・・

「なんじゃいつワレエ!!」

ヤクザまがいな返事が返ってきた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あまりのことにしばし絶句

しかしそんなことをしている間にもインターホンからは

「オウ、何かしゃべらんかコラア！いたずらかあオイ、いたずらならゆるさへんでえ！そこで待つとれクソガキ！」

とかいう物騒な言葉が聞こえていた

その言葉で我に返った耕太がインターホンに向かって必死で話す

「・・・・あの、今日ここに越してくることになってた岸崎です」  
その言葉を聞いてインターホンが沈黙する

あれ俺なんか変なこといったかな？

耕太が不安を感じ始めた頃にやっと向こうから声が聞こえた

「・・・・・・・・ああ、岸崎のかいな」

落ち着いて聞くとその声は女性のように聞こえた

「はっはい、今日からお世話になります！」

耕太は先ほどのことを思っ  
てインターホンの前で頭まで下げて挨拶をした

「挨拶はいらん、あんたの部屋は303号室や、鍵は部屋に置いてあるさかい早くいきいや」

先ほどのまでの感じとうってかわったような落ち着いた雰囲気です  
彼女に耕太もいくらか緊張を解いて挨拶をする

「はい、ありがとうございます、今日からよろしくお願いします、あつあとでそちらにちゃんと挨拶にいきますので・・・」

「挨拶はいらん言つたやるこのボケ！さっさといけ！」

その言葉に耕太は泣きそうになりながらダッシュで部屋へと向かった後ろからは

「絶対くるんやないで〜！」  
という声が聞こえていた

三階までの階段を一気に駆け上り息をついた

「ふう〜何だっただんだあの管理人」

耕太は管理人に言われた303号室の前まで歩きドアノブに手をかけた

「俺こんなところでほんとにやっていけるのかなあ、いやだめだ俺はこつちで頑張るんだ、いやでも・・・」

とか何とか言いながらドアをあけ、中に入った

「おお、親父の言つてた通りいい部屋じゃ・・・」

耕太の言葉と動きはそこでフリーズした

なぜかって？

そりゃあ自分の部屋であるはずの場所に裸の美少女がいたら誰だつてフリーズするさ！

## 第1話（後書き）

第1話更新しました

相変わらず読みにくくてすいません

メインヒロインの出番がほとんどないってどういうことだー！と自分  
に怒ってみたり

えゝこんな小説にお付き合いいただいた皆さんありがとうございま  
すm（――）m

感想なんか書いていただけたらとても嬉しいです

## 第2話（前書き）

部屋に入ったら、全裸の美少女がいて・・・

## 第2話

扉を開けてそこにいたのは裸の美少女だった

腰元までのびる艶やかな黒髪

少し幼いが整った顔立ち

バストは小さめだが整ったボディーライン

一系まとわぬ美少女がリビングに立ちこちらをみてフリーズしていた

先にこちら側に戻ってきたのは耕太だった

「……………っ！」

顔を真っ赤にし、何も言わず回れ右をして入ってきたドアから外に出た

「ツキヤーーーーー！ーーーーー！ガッツ！ゴン！パリン！グシャ！」

と、やっとフリーズが解けた少女が悲鳴を上げ手当たり次第にものを投げる音が外まで聞こえていたが、幸いほかの部屋から出てくる人はいなかった

「部屋間違えたか？」

と扉の脇にある表札を確認する

303号室

とたしかに書いてあった。

「間違いじゃない・・・よな」

何度か確認するが、そこにはたしかに先ほどあのおっかない管理人さんに言われた番号が書かれていた。

「じゃああの子は・・・」

耕太が首をひねったその時303号室の扉が勢いよく開いた、扉に寄り掛かっていた耕太は吹き飛ばされ地面を転がった。

「・・・ッ！何しやがんだ!!」

立ち上がり自分を吹き飛ばした扉から出てきた少女に怒鳴る、さすがに今は服を着ているが急いで着たのか所々よれている、怒鳴られた少女はそれに負けない大声で

「それはこっちのセリフよ！、ひとつはだか見ておいて！」

と怒鳴り返してきた、その迫力に一瞬たじろぎそうになるが耕太も負けじと怒鳴り返す。

「見たくて見たんじゃないやねえよ、だいたい人の部屋に勝手に上がり込んで何やってんだ！」

「はあ？何言ってるの、ここは私の部屋よ」

お互いの言葉に二人とも疑問符を浮かべ首を傾げる

「いや、だって管理人さんにこの部屋だって・・・」

と耕太は表札に目を向ける、そこには何度も確認した303号室の文字があり、よく見るとその下、入居者の覧に岸崎耕太の文字がきざまれているを見つけた。

「ほら！ここにも俺の名前が書いてあるし」

表札を指さし少女に言う、少女は驚きの表情を浮かべながら表札を見て言った

「何言ってるのよ、ちゃんと私の名前が、星村咲妃ほしむらさきって書いてあるじゃない！」

今度は耕太が驚きの表情を浮かべ表札を見るが・・・

「・・・俺の名前もちゃんと書いてあるけど」

という耕太の言葉に星村咲妃と名乗った少女も表札をのぞき込む、そこには・・・

部屋番号      303号室

入居者      岸崎耕太&星村咲妃

とそう書いてあった。

「は？」

と二人はそろって本日二度目のフリーズにかかった。

## 第2話（後書き）

第2話アップですo(＾o＾)o

読んでくださってありがとうございますm(┐┌)m

テンポの悪い小説でごめんなさい、これからはもっと読みやすくなるように努力します(<┐>)

よろしければ感想なんかも書いてやってください

### 第3話（前書き）

こっこれはいつたいたうなってるんだ  
なんで俺の名前の隣に女の子の名前があるんだ???

### 第3話

部屋番号 303号室

入居者 岸崎耕太&星村咲妃

そう書いてある表札の前でフリーズしていた二人だったが、今回も先に目覚めたのは耕太だった

「・・・な、なんだこれは」

その声で咲妃となのった少女も現実へと戻ってきた

「・・・何で私の名前の隣にあんたの名前が書いてあんのよ」

と耕太へ疑問の声を投げかけるが

「俺だつてしらねえよ、誰だか知らないが余計な装飾までしていきやがって」

「そうだね」

耕太が返事をするとき咲妃はその表札を見て少し顔を赤らめてうなずいた

二人の名前が書いてあった表札はごく丁寧にもたくさんのハートマークで装飾してあった

まるで新婚の夫婦が住み始める新居のような表札になっていた

「・・・・・・・・」

そのとても恥ずかしい表札を前に二人はまた言葉を失ってしまった  
なんだか気まずい空気が流れる中、咲妃が口を開いた

「ねえ、なんかお互い変なことになってるみたいだしとりあえず管理人さんのところ行ってみない？」

頬を少し赤く染め視線を外しながらのその言葉に耕太は

「そう・・・だな、ここにいてもどうしようもないもんな」

と頷いた、耕太の心の中ではこの状況を何とかしなくてはという感情とあの管理人に会いに行くのは気が引けるという感情がせめぎ合っていたのだがその辺は黙っておく。

二人はエレベーターに乗り込み1階のボタンを押した。

エレベーターの中でも気まずい空気が流れていたがその空気に耐えきれなくなった耕太が口を開いたが

「あのさ」

二人の声が重なった

「あっ」

「さきにどうぞ」

と耕太が言っが

「うっん、そっちからどうぞ」

と返された、ここは遠慮するといつまでも続きそうだったので、耕太が口を開く

「あのさ・・・さっきはゴメン、わざとじゃないから」

耕太の言葉に咲妃も顔を上げ返す

「あついや、ううん、鍵かけてなかった私が悪かったんだし、私こそ怒鳴ったりしてゴメン」

「いや、あれは俺が全部悪かった」

「そんなことない私が・・・」

「いや俺が」

私が・・・

俺が・・・

いや・・・

でも・・・

やっぱり・・・

なんて言い合ってるうちに1階につきエレベーターの扉が開いた。二人は言い合いをやめまたも気まずい雰囲気を漂わせながら管理人さんの部屋へと向かった

1階の一番端にあつた管理人室を見つけ耕太はドアの脇に備え付けであるインターホンを押した

ピンポンッ

そんなインターホンの音に続いて部屋の中から人が動く音が聞こえ  
ドアが開いた

「だれや」

と出てきたのは女性だった見た目は20代前半くらいだろうか、T  
シャツにホットパンツという何とも露出の高い格好をしているせいでその整ったプロポーションが必要以上に強調されている、スラツ  
とのびた美しくきれいな足に、しまったウエスト、大きくふくらん  
だ胸元、まるでモデルのような体つきの女性だった、顔もとても綺  
麗で整った作りをしていて街ですれ違えば思わず振り返ってしまい  
そうな美人だった、軽く染めているのだろうセミロングの茶髪もそ  
の容姿にあっていた。

隣に立っている少女もかなりの美人なのだが、彼女はあくまで「可  
愛い」であって、大人の魅力を振りまく彼女とは違って、耕太  
は声もなく彼女に見とれてしまった。

ぽけーっと立つ耕太を見て部屋から出てきた女性は眉間にしわを寄  
せた

「おまえかあ、来んでええっちゅーたやろお」

その関西弁と声でやっこの女性がこのマンションの監理人だと理  
解した耕太があわてて口を開く

「いや、挨拶とかじゃなくてちょっと困ったことがありますて・・・」

耕太がそういうとその女性は首を傾げて考え込む仕草をした

「困ったこと？なんや？あの部屋になんか問題でもあったんか？」

「いっいえ部屋には何の問題も無かったんですが、あのなぜか彼女と俺の部屋が一緒になってるんですけど・・・」

と隣に立っている少女の方を指しながらそういった

その言葉に監理人は疑問の表情を浮かべてさらに首をひねっていた

「それに何の問題があるんや？あんたらは一緒の部屋でええはずやろ？」

その言葉に耕太と咲妃は

「はっ？」

と声をそろえた

その反応に監理人の女性は驚きの表情を浮かべ

「もしかして自分らの親からなにもきかされてないんか？」

と聞いてきたので二人は素直にただ頷いた

「マジかあゝ、まったくあんのボケども」

女性は「アチャー」といった感じで手を額に当ててそんなことを言っていた

その動作を不思議に思った咲妃が声をかける

「あのおゝ、一体どうなってるんですか？」

「じつはな・・・」

女性は二人の方に向き直り真剣な顔でこう言った

「あんたらは二人で一緒の部屋にすむことになった」

時が止まったような気がした・・・

### 第3話（後書き）

第3話更新しました！d（^o^）b

遅れて本当にすいませんでした（TOT）

待っていてくれた人がいたら本当にごめんなさい、インフルエンザにかかったり、祖母が体調崩して入院したりで忙しくて全く書けませんでした・・・（（（（（^ー^；）

これからはっきりやっていきますのでよろしくお願いいたします

m（ーー）m

## 第4話（前書き）

なんなんだ？ いったいなんなんだ？

## 第4話

「……そ、それは、一体、どういうことでしょうか？」

口を開いたのは咲妃だった。

必要以上に丁寧で所々つまつたしゃべり方だったが

「どうもこうも、言った通りやあんたらは一緒の部屋で暮らすようになつとる。」

「だからそれが何でか聞いてんだよ！」

そう耕太がつつかかると

「ウチが知るかあ！あんたらの親父にでも聞きゃあええやろがあ！」

キレられた

その剣幕に押され二人はそろって後ずさり

『すいませんでした！！』

頭を下げた逃げ出した

管理人さんから逃げだし階段を駆け上がり二人は自分の部屋（仮）に戻って一息ついた

「はあはあ、怖かった」

「そうねでも何で私たちエレベーター使わないで階段駆け上がったきたんだろ？」

まあそこは作者の気まぐれということだ

「とにかく管理人さんからは特に何も聞けなかったし、やっぱりお互い親に電話かけてみよーぜ」

「・・・うん、そうだね」

と耕太の言葉に頷き二人ともポケットから電話を取り出し短縮ダイヤルから電話をかける

『プルルルル』

二人分の呼び出し音が部屋に響く

『ッもしもし耕太「咲妃」か?』

3コール目で同時につながり同じセリフが聞こえてきた

『親父「お父さん」これはいったいどう言うこと(だ・なの)!!?』

こちらと同じ言葉で怒鳴る

なんだか電話の向こうから同じような怒鳴り声が聞こえた気がした

『そう怒鳴るな隣にまで聞こえてしまうではないか、なあ星ちゃん』  
『そうだ岸君の言うとおりだ少し落ち着きなさい』

そんな声が向こうから聞こえてきた

耕太と咲妃は一瞬顔を見合わせ今度は驚愕の声で叫んだ

『ちよつとまで、親父もしかして今星村の親と一緒にいるのか?』

耕太が問いかける

『そつだが何か問題があるか?』

『何で!』

今度は咲妃が叫ぶ

『まあ落ち着け、それも含めて説明してやる』

との言葉で二人は一樣落ち着く

『実は私と星ちゃん、咲妃ちゃんのお父さんはいまアメリカに  
いるんだ』

『はあ？何やってんだよ』

耕太がイライラとした口調で答える

『仕事だ、今度こちらに進出することになってな、星ちゃんは  
仕事のパートナーだ。』

『親父達は知り合いだったのか？』

『まあな、私と星ちゃんそれとその管理人の舞ちゃんは高校時代  
のクラスメイトでな、家賃も安くしてもらってるよ』

『それで話が分からないんだが、それがこれとどういう関係がある』  
さらに不機嫌な口調で耕太が言う

『うむ、実はこちらの仕事が長引きそうでな、少なくとも1年は帰  
れない、私も星ちゃんも父子家庭だった一人の子供を日本で一  
人暮らしさせるのが心配でな、そこで舞ちゃんと一緒に面倒見ても  
らおうということになったわけだ』

『だったら別に一緒の部屋にしなくても・・・』

耕太と咲妃が言うが

『いや、あいにく都合のいい部屋が一部屋しかなくてな、それに一  
人より二人の方が何かと便利だろう？』

『そうかもしれないけど普通年頃の男女を同じ部屋におくか！？』  
耕太がそう声を荒げるが、電話から今度は星村のお父さんの声が聞  
こえる

『大丈夫だよ耕太君、僕はキミになら咲妃をあげてもいいと思っ  
てるから』

『ちよっお父さん！』

隣で咲妃が顔を赤くして声を挙げるが親父どもは気にせず話を続ける

『まあそういうことだ、家賃は毎月こちらから振り込むし、生活費も十分に支給する、何も心配することはない』

『待てよ親父そういうことじゃなくて・・・』

『それじゃあ咲妃、耕太君元気だね』

『待ってお父さん・・・』

プツツツツツ

一方的になんだかいろいろ言われて切られた携帯電話を見つめ

「まあ・・・なんて言うかお互い親には苦勞するね」

「そうだね」

二人はお互いに目を合わせ

全く同じタイミングで深い・・・とても深い溜息をついた

そして

「なにはともあれ、これからよろしく、咲妃」

耕太は咲妃に向き直り笑った

「こちらこそよろしく、耕太」

咲妃も向き直って耕太に笑顔を向けた

#### 第4話（後書き）

遅れてしまって申し訳ありません（TOT）

いろいろトラブルがあつてなかなか書けませんでした、待っていてくださった方がいたなら本当にごめんなさい。

えー、実は連載小説をもう一つ抱えてしまい、一つでも手一杯なのに二つなんてw（o）wってな状態なのでこれから更新がさらに不定期になるかもしれませんが、頑張って書くのでこれからもよろしく願いますm（l）m

## 第5話

二人がこれから住むことになる部屋で、この部屋の主である二人はダイニングテーブルの対面に座り、顔をつきあわせていた。

「……ってことはつまり、実は俺らは学校も同じだったりして実質一日のほとんどを同じ場所で過ごすってことだな」

「うん、まあそうなるね、あつ！でもまだクラスまで一緒かどうか分かんないし」

「そりゃそうだけどさ」

とりあえず二人は自分の知っている情報の整理と今後の生活について話し合っていた。

お互いの話で分かったのは、お互い遠方からでてきたばかりでこちらの事はほとんど何も知らないこと、二人が同じ高校である事ぐら이었다。

まあ実際面倒なのはほとんど親父どもがすませていたので情報不足でもそこまで深刻な問題でもないのだが。

「さて、問題はこれからどうするかだな」

耕太が溜息をつきながら言う

「そうなんだよねー」

咲妃も頬杖をつきながら答える

二人が悩んでいるのは、これからの生活についてだった。

金銭面は親父どもからの援助があるので問題ないのだが、炊事・洗濯・掃除etc・・・色々な家事をどうするかなのである。

「……とりあえず当番制でいいよな」

耕太が咲妃にそう言う

「……まあ、それが妥当よね」

となぜか険しい顔で返してきた

彼女の心の中には

あたしってば掃除とかならできると思うけど料理はさっぱりなのよね、当番制はそりや妥当だと思うけど、どうしよう下手なもの作って食べさせるわけにもいかないだろうし、毎日カップめんはさらにあり得ない。……！でも耕太だって料理ができる訳じゃない…….と思う、だって男の子だし！たぶん向こうも今頃食事どうしようか悩んでるんだろうな。

……仕方ない、これから頑張って料理の勉強しよう！

という葛藤があつたりしたのだが耕太はそんなこと知る由もなく険しい顔をして頷く咲妃を不思議そうな顔をして見ている。

まあそんなこんなで何とか取り決めはなされた、たとえば……

学校では同居の事は極力隠す

家の事に関するあらゆる家事は当番制（力仕事などは除く）

靴を脱ぎ散らかさない

洗濯は自分で

などがそうである、ちなみに前半は耕太の意見で後半は咲妃である。

そうしてひとまず落ち着いたところで耕太が立ち上がり台所に向かった

「どうしたの？」

と咲妃が声をかけると

「晩飯まだだったろ？俺が作るよ、簡単なものしかできないからあんまり期待しないでくれよ」

そういつて冷蔵庫から親父どもが用意していった食材を取り出して

いく。

咲妃が立ち上がり手伝おうとするが

「あゝいいいいよ、座ってなすぐだから」

と断られ、咲妃はおとなしく座っている事にした

しばらくして出てきたのは見た目普通のチャーハンだった。

とくに変わったところはないように見えた、至って普通のチャーハンだった、咲妃はホッと安心から息をついた、これですごい料理でも出てきたらどうしようかと思っていたところだった。

「ごめんね、こんなもんしかできなくて」

と申し訳なさそうに言っていたが咲妃は満面の笑みを浮かべ

「いいのよ、ありがとうおいしそうじゃない」

そういつてチャーハンを口に運んだ・・・瞬間、衝撃が走った

「こっ・・・これは！」

「えっ、もしかしておいしくなかった？」

耕太が心配そうな顔をする

咲妃は体を震わせしばらく黙った後に言った

「おいつつつつしーーーーー！何これ何でこんなにおいしいの？ねえなんで？」

「えっと・・・隠し味に俺特性のソースが入ってて」

咲妃のいきなりのハイテンションに押されながらも答える

咲妃はというと自分で質問しておきながら、聞いているかいのかガツガツと食べ皿をからにしていた、そして

「ごちそうさま！おいしかったー！」

耕太はまだ一口も食べていない

「いいいえ、お粗末様」

と耕太も皿を空けていく

咲妃はニコニコしながら耕太の食べる姿を見ていた

「いやーホントにおいしかった、耕太って料理上手なんだね、あつ片付けは私がやつとくよ」

耕太の食べ終わった皿を受け取り台所へと向かう

「いいよ、俺がやるよ」

と耕太が言っていたが

「いいから耕太はお風呂にでも入ってきなさい」

と一蹴されおとなしく従うことにした。

皿を洗いながらもおいしいものを食べられた咲妃はご機嫌だった

「おいしかったなー、これから毎日あんなのが食べれるとしたらここは天国だな」

と鼻歌まで歌っている、・・・が。

「な〜んか忘れてる気がするのよね」

と首をひねり、しばらくして・・・

「思い出した！私も作るんじゃない」

とさっきまでのニコニコはどこへやら、青ざめて皿を持ったまま絶句していた。

まあ、耕太の料理と比べられると思うと仕方がないのかもしれないが。

「どうしたんだ？咲妃？」

と風呂からあがった耕太が声をかけるが咲妃にはもはや何も聞こえていないようだった

後日、ほぼ全て丸焦げで原型がなんだか分からなくなった咲妃の料理を見て今度は逆に耕太が青ざめたのはまた別の話。

## 第5話（後書き）

だいぶ遅れてしまつて申し訳ありません。

最近いろいろな心労が重なりまして、軽く鬱になりかけた状態で書いておりますので、文章の乱れは許してください。

それでは、感想・評価・メッセージお待ちしております

## 第5・5話

「つかれた」

パジャマに着替えベッドへ飛び込んだ咲妃が一番に口にした言葉がこれだった。

「今日はホントに色々ありすぎて大変だったよ、まだ部屋の片付け終わってないし・・・」

部屋を見渡すと未開封のままのダンボールがいくつもおいてあった。

「・・・ホントに今日は色々あったな。」

そういつて咲妃は目を閉じ今日の出来事を思い返した

\*

「・・・ここかー！おつきいなー」

日の落ちかける、夕暮れの中咲妃は新しい我が家となる所を見上げていた

「いいところじゃない、お父さんもたまにはいいことするね。」

そんなことを言いながら重いバックを持ってマンションの中へ入っていた。

「えーと、やっぱり最初はいいさつかな？」

と咲妃はオートロックドアの前で管理人室のインターホンを押した。

ピンポーン  
ピンポーン

と何度か鳴らすが返事がない

「あれー、留守かなあ」

さらに何度か押してみていると、不意に

「ウチに何か用か？」

「うひゃあ」

後ろから声をかけられ咲妃は飛び上がった

「うひゃあつて・・・まあええわ、で、ウチに何か用か？」

咲妃の悲鳴に驚いた顔をしていたが、すぐに気を取り直し聞き直してくる。

咲妃の方はといえば、自分に声をかけてきた女性の美しさに見とれていた。

すごいキレイ、モデルさんか何かかな・・・

そんなことを考えていると

「おーい、どないした？」

と女性に声をかけられハッと我に返る

「えっえと、このマンションの方ですか？」

と、しどろもどろに返す

「ウチはこの管理人やけど？」

「えっそうなんですか？、あっえつと、私今日からここでお世話になります星村といいます、これからよろしくお願いします」

そう言つと管理人と名乗った女性はああと言つ表情で何も言わず鍵を差し出してきた。

「え？」

「そこアンタの部屋、んじや。」

「え？あつ！ちよつと・・・」

女性は無造作に鍵を渡すとそのままどこかへ行ってしまった。  
取り残された咲妃は、そのあまりにもあっさりした受け渡しに唖然としていた

「これってこんなもんでいいの？」

一人で呟き、いまいち釈然としないままオートロックを開けエレベーターに乗り込んだ

「・・・ここね」

鍵に書いてあった部屋番号を確認し扉を開ける

「わぁ、けっこうひろーい」

すでに送った荷物は運び込まれており部屋の隅に積み重ねてあった。  
その近くにバックを置き、一息つく。

「はー、疲れた」

と、ここで咲妃は自分がだいぶ汗をかいている事に気づいた  
今日はずっと電車で揺られ、ここまで重い荷物を持って歩いてきた  
のだ、女の子にはなかなかキツイ。

「シャワーでも浴びようか」

片付けは後でいい、今はひとまず汗を流したい、と咲妃はバスルームへ向かった。

シャワーで軽く汗を流し着替えようとして、咲妃は気づいた、着替えを出していない、タオルは持ってきたのに、さすがに汗をすった服をまた着る気にはならない、どうしようかと少し考えて。

私一人なんだし、いいよね

とそのまま部屋を出た。

たしかバックに着替えを入れていたはず、とそこに向かっていたと

き、ちょうど玄関の前を横切ったとき、不意に扉が開いた。そして「おお、親父の言ってた通りいい部屋じゃ……………」

一人の男が入ってきた、

咲妃はその場で固まってしまった、突然の事態に頭がついていかないのもあるが、何よりその男の容姿に。

世の女性が自信を失いそうなほどに綺麗な黒髪に、中性的でありながらどこか凛々しく頼りがいのある表情、170はこえるであろう身長、服の上からでも分かる綺麗なスタイル。

まるで、物語から出てきた王子のような雰囲気を持つ少年だった。

＊

「あの時はホントにびっくりしたな」

咲妃はあの時彼に見とれてしまっていた。

まあその後は大暴れしていたわけだが…………

「あんな格好いい人と、一緒に暮らすのか……………」

はじめこそ、どうしようかと思ったが、顔もいいし優しい、料理もすごいおいしいし、なんだか初めてあったはずなのに親しみやすい人だと思った。

実は一人で暮らすのは、不安だったが彼とだったらうまくやっていける気がする。

「ふふっ、なんだか楽しみ」

そろそろ寝ようと、布団に潜り込み電気を消そうするために手を伸ばし、ふと考える。

これって周りから見たら同棲…………恋人同士みたいに見えるのかな。

と頬を染めて考えていたが、ハッとして首を左右に振り

「なっ、なにを考えてるのよ私は……………」

と顔を真っ赤にして電気を消し布団をかぶり、咲妃は眠りに落ちていった。

## 第5・5話（後書き）

えー、またも更新が滞っておりますして本当に申し訳ありません。ですが！私も一応高校生として高校総体くらいあるわけでして、そのくらいは勘弁してくださいという訳なのであります。

えー、それに近々テストもある次第でございましてまたも不定期更新になることをお許しください。

それでは私自身に対する質問やメッセージ、小説の感想や評価もお待ちしております。

最後になりますが、みなさま読んでくださってホントにありがとうございます。

## 第6話

「ふう、こんなもんでいいかな」

部屋に積んであった荷物の片づけを終えた耕太は一人そんな声をあげた。

コンコン

と、ちょうどその時部屋の扉がノックされ咲妃が顔をのぞかせた

「耕太、終わった？」

「ん？ああちょうど今終わったとこ」

その言葉を聞き咲妃はニコツと笑った

「じゃあさ、いつしよに買い物いこう」

「・・・で、何からいく？」

「ん、今日の晩ご飯からいこうかな？？」

というわけで耕太と咲妃は近所にあるスーパーに来ていた、咲妃曰く、今日の晩ご飯はカレーが食べたいし（作るのは耕太）歯ブラシとか洗剤とか日用品もないから買いに行こうと思ったんだけど、一人だと心細いから一緒に行こう、ということらしい。

「じゃあまず野菜から行くか」

と耕太がかごをもって歩き出し

「あつ、まってよ」

と咲妃もその後続く

（ふん、なかなかいいところだな）

と、歩きながら耕太は周りを見て思っていた。

（マンションからも近いし、駅も近くにある何より品物がいい、値段もお手頃だし質も悪くない都会はもつと質が悪くて高いものばかりだと思ってたけど・・・）

なんて事を思っている彼はとても所帯じみている、まあ早くに母を亡くし父と二人で暮らしてきた事から考えれば仕方ないのかもしれないが。

むしろ問題は彼のその悩ましい表情が周りの奥様方の心を鷲掴みにしてしまっていることで、そして彼の後ろをトコトコついていく美少女に男どもが振り向くことも問題だった。

そんなこんなで注目を浴びつつ野菜売り場にたどり着き二人で選ぶのだが、こんな経験のほとんどない咲妃にとっては何をどうしたらいいのか分からず、ほとんど耕太が一人で選ぶことになった。

「ねえ耕太、ジャガイモってどれがいいの？」

と、袋分けされたジャガイモを指さし耕太にたずねると耕太は難しい顔で考え込んだ

「味で言えば男爵がおすすめなんだけど、男爵は荷崩れしやすいんだよ、その点を考えるとメークインにした方が・・・ということこそっちのをとってくれるかな？」

咲妃にはなんだか良くわからない葛藤を終え一つの袋を指さす

「はいはい」

と咲妃がそれをかごに入れる

「これで全部そろったな」

かごの中身を見ながら耕太が言う

「あれ？お肉は？」

「うちにあつたろ」

「ああ、そっか」

「じゃ次行こう」

「うん」

とそんな会話をして二人は日用品コーナーへ歩いていく

そんな二人の様子を見ていた周りのみなさまは

「いいわねえ若いつて」

「料理が苦手な奥さんと、料理好きな旦那さんって感じかしら？」

「夫婦にしては若くない？カップルかしら」

「私たちも若かった頃はあんな感じだったわよね」

「そ、そうだったか？」

「それにしても二人ともかわいいわねえ」

と話に花を咲かせていた

一方日用品売り場の二人は

「ねえ耕太、歯ブラシこれでいい？」

「ああいいよ」

「じゃあ、はい」

と咲妃が色違いの歯ブラシをかごに放り込む

「なあ咲妃、トイレットペーパーこれでいいかな？」

「えゝ、こっちの方がいいよ」

「でもこっちの方がやすいし・・」

「こっちがいいの!」

「分かった、こっちな」

と耕太がトイレットペーパーの袋を手取る

そんなことをしながら買うものを選んでいる二人を見ていた方々は

「やっぱり若夫婦なんじゃない?」

「そうにしか見えないわね」

「新婚時代をおもいだすわねえ」

「そうだねゝ」

と若い二人に和んでいた

奥様方が和んでいたその頃二人はレジに向かい会計を行っていた。

「結構買ったね」

「そうか?こんなもんだろ」

とそんなことを話しているとレジのおばさんが声をかけてきた

「初めて見る顔だね、引越してきたの?」

急に話し掛けられ驚いた様子の二人だったが、すぐに耕太が返す

「ええ、つい先日そのマンションに」

「そうなの、若いのにたいへんだね」

それに今度は咲妃が答える

「いえそんな、この人がしっかりしてるんで大丈夫ですよ」

「そう、それじゃこれから二人で仲良くガンバってね」

「はい、ありがとうございます」

と耕太が答えて二人はレジを抜けスーパーを出ていった

そんな様子を見ていた周りの方々は

『やっぱり若夫婦だ』

と声をそろえた

## 第6話（後書き）

まず最初に言っておきます

遅れてホントにごめんなさい！！

いやあのですね、PCがウィルスにやられたりなんか色々ありまして・・・はい、言い訳です、すいません。

これから頑張るのでヨロシクです

## 第7話

ブルルルルル・・・

時は朝の4時、まだ老人くらいしか起きておらず世間的には早朝と呼ばれる時間帯に電話が鳴った。

その音に自室で眠っていた耕太は目を覚ました。

「・・・ふあああつ、誰だよ朝っぱらから」

軽くばやきながら部屋を出て電話をとり不機嫌な声をだす。

「もしもし・・・」

「やあ！耕太おはよう！」

「・・・・・・親父」

朝早くからハイテンションで電話をかけてきたのは父だった

「何か用か？」

「まあそんな不機嫌な声を出すな、ちよつと伝えたいことがあつてな」

「こんな朝っぱらにたたき起こされたら誰でも不機嫌になるよ、で、なんだつて？」

「ああ、実はなそちらにもう一人同居人が増えることになった」

父の発言にまだ寝起きで反覚醒状態だった耕太の脳はその言葉を理解できず、1分後それを理解したとき耕太は・・・

「・・・・・・はああああ！？」

とりあえず叫んでいた

その声は家中に響き渡り寝ていた咲妃もたたき起こした

「ちよつ、ちよつとお何なのよ？」

咲妃はそう耕太に問いかけるが耕太は受話器に怒鳴りつけるだけで咲妃に気づいてもいない

「ねえ耕太」

「おい、どーゆうことだよ？いきなりもう一人とかわけわかんねー

ぞ！」

「ちよつと」

「ああ！仕方ないじゃねえよ何考えてんだバカか！」

「耕太つてば」

「うつせー、バカつて言うやつがバカつてどこの子供だ貴様は」

「・・・聞け」

いつこうに話を聞こうとしない耕太に咲妃は手近にあったリコーダーを（なぜあるのかは不明）投げつけた。

ゴツツンとけつこうすごい音がして耕太の頭が傾いた。

そのまま動かない耕太から受話器を奪い耳に当てる

「・・・もしもし」

「おお！咲妃ちゃんか、久しぶりだな」

「おじさん？おはようございます、で、どうしたんですか」

「さつき耕太にも言ったのだが、そちらに同居人が増える事になった」

「はあ？どういうことでしょうか？」

こちらは耕太よりずいぶん落ち着いているようだ後ろで耕太が「はつ俺はなにを？」とか言っていたがとりあえず無視

「まあこつちでも色々あつて仕方なく・・・」

耕太の父が珍しく歯切れ悪く答える、その時

ピンポン

玄関でインターフォンが鳴った

「おお来たようだな、それでは後はそつちに聞いてくれ、じゃっ！」

それを聞きつけたのか耕太父は一方的にそう言つて電話を切った

「あつちよつとおじさん？」

通話の切れた受話器を見つめその後耕太と咲妃は顔を見合わせ、全く同時に、盛大に、大きな溜息をついた。

「とりあえず、新しいお仲間の顔でも拝みますか」

「うん」

ピンポン

二人が笑い会ったとき、せかすようにインターフォンが鳴った

「あつハイ今でまーす」

そういつて咲妃が扉を開ける

そこにいたのは

「・・・子供？」

小さな女の子だった。

年頃は7〜8歳くらいに見える、綺麗な黒髪を後ろで二つに束ねる  
いわゆるツインテール、子供らしいくりつとした目元に少し緊張と  
警戒を浮かばせている、小動物を彷彿とさせるかわいらしい少女だ  
った

「はじめまして、御坂望<sup>みさかのぞみ</sup>です」

その少女はそう言うてペコリと頭を下げた、その態度は見た目の幼  
さと比べてずいぶんとしつかりしていた。

「・・・ええと、キミが・・・その・・・新しい同居人？」

耕太がおずおずと問いかけた

「はい、そうです」

はつきりした答えがすぐに返ってきた

耕太と咲妃は顔を見合わせ望に笑顔で向き直り

「・・・そっか、じゃあひとまずあがってよ」

と言ってリビングに通した

・・・続く!!

## 第8話

御坂望と名乗った少女はキョロキョロと周りを見回しながらリビングのテーブルに着いていた

そんな少女に咲妃が問いかける

「・・・えっと、望ちゃんとりあえず話を聞かせてくれない？」

声をかけられた望が咲妃に向き直り答える

「はい、実は私の両親とあなた方の親が知り合いだったらしくて、私が行くところがないと言ったら、それならここでくればいい、と」

見た目からは考えられないしっかりした言葉が少女から出てくる

「イヤ、ここでくらせつてのぞみちゃんご両親は？」

望の話に違和感を感じた咲妃がそうたずねると望の表情が変わる

「父も母も4年前に事故で・・・その後は親戚のところでお世話になっていたんですが・・・私は家の子じゃないので邪魔者でした、それを耕太さんと咲妃さんのお父さんが・・・」

悲しそうな表情で言った望の言葉に部屋の空気が重くなる

「・・・あつ、ゴメン望ちゃん、私・・・」

咲妃がそう言つて慌てて謝る

「いえ、いいんです気にしないでください・・・」

そう言つた彼女の表情はとても悲しそうだった

「でも・・・」

咲妃がまだ何かを言おうとしたとき今まで黙つて座っていた耕太が立ち上がり言つた、とびきりの笑顔で。

「まあとりあえず、家族が3人に増えたって事だから仲良くやつていこうや」

咲妃と望は耕太の突然の発言にしばらく啞然としていたが

「そっそうだね、望ちゃんこれからよろしくね」

そう言つて咲妃が手を差し出し

「ハイ」

と望も手を取った

その様子を微笑んで見ていた耕太が言った

「それじゃ今日は望の引越祝いで豪華なメシ作らないとな」

「えっホント？」

耕太の言葉に咲妃が目を輝かせる

「ホントだよ、さてそれじゃみんなで買い物行きますか」

「うん！」

望はふたりのその様子を黙ってみていた

3人が買い物に来たのはいつものスーパーだった

このスーパーでは最近引越してきた初々しい新婚夫婦の微笑ましい買い物風景（もちろん耕太と咲妃のことですよ）がすっかり名物になっていた。

近所の方々の間では、

「あの二人のおかげで新婚時代を思い出した」

「最近旦那が優しくなった」

「冷めた夫婦関係がまた息を吹き返した」

と、様々な効果が出ており、二人目当ての客もいるため店側は二人を逃がさないために、二人には気付かれないように割引したり、二人で来店のお客様の割引引くなどいろいろな技を駆使している。

「とうちゃーく！」

「近場にこうゆうのがあるってのはうれしいよな」

そこへ話題の若夫婦が今日も買い物にやってきた

常連のお客さんや集まって話し込んでいる奥様方も声のしたほうへ振り返った

「さーて、何が食べたい？」

耕太が問いかけると

「私ケーキが食べた〜い」

と咲紀が答える

「それじゃ晩飯にならんだろ」

「いーじゃん、かっていーじゃん」

とここまではいつもの風景だった

・  
・  
・  
が

「……あの、私は何でもいいです」

と、遠慮がちに言う少女が二人の間に挟まれ手をつないでいた

「遠慮しないでいいんだよ。耕太の料理おいしいから好きなものい  
つてみなよ」

そう咲紀が言い、望が耕太を見上げると耕太も頷いてみせる

すると望はこれも遠慮がちに

「えっと、じゃあハンバーグが食べたいです」

「耕太のハンバーグはおいしいよ」

「ああ、気合い入れて作るから楽しみにしてな」

その後、3人はさっさと買い物を終え店を出ていった。

3人がでていったあと、彼らが来てからほとんどフリーズし続けて

いた店内の全員が

「子持ちいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！」

声を合わせて叫んだ

「まさか子供がいたなんて……」

「いや、まさかいくらなんでも若すぎないか？」

「だけどあの雰囲気は・・・」

「学生結婚？それにしても子供が大きすぎる」

「いったい・・・?????」

耕太ファミリーはまたも謎と話題だけを残して去っていった。

一方

「ありがとうな、準備手伝ってもらっちゃって、でも望料理上手なんだな」

「いえ、そんな・・・」

「わ、私よりもずっと上手だよぉ」

とほのぼのしてたとき

## 第8話（後書き）

今回もまた遅くなりました、ここまで来たらもう更新遅れも、この小説の良いところと思っていただく訳にはいきませんか？

ダメですよ、ハイっすいません！

まあ今の時期は忙しいわけですよ、季節の変わり目で色々ある訳でして、ハイッ、というわけで第8話です、楽しんでいただければ幸いです。

## 第9話

食卓にはおいしそうな料理が並んでいた。

途中、咲紀が

「私も手伝う」とか言い始め料理を黒こげにしそうになったりしていたがその辺ははぶかせていただきます。

これは決して、料理についてあまり詳しくないので、調理中の事を書くとボロがでそうだとかそういうことでは決してありませんのであしからず。

「さて、それじゃ…」

3人でテーブルにつき料理を目の前にして耕太がいった。

いままであまり表情のみえなかった望が目の中の料理に目を輝かせ、咲妃はそんな望を優しい目で見ている。

「みなさん一緒に、せーの！」

『いただきます！』

声と同時に望が目の前にあったハンバーグを口に運んだ

「……おいしい！」

望は驚きの表情で耕太を見た。

「そーか、そりゃよかった、作ったかいがあるよ」

とゆう耕太の答えを聞いているのかいないのか望の意識はもうハンバーグに戻っている。

「ほら、そんなに急いで食べたらのどに詰まるよ」

と咲妃が望のコップに飲み物をつぐ。

「モグモグ、あっありがとうございます」

と顔を上げ食事に手をつけずに自分の方を見ている二人に気づき慌てて言った

「すっすいません私一人だけ食べちゃって……」

「うっん、気にしなくていいよ、これは望ちゃんの歓迎の為のごちそうなんだから」

咲紀が優しく言い

「そうそう、それと敬語はやめてもっと楽にしてよ、自分の家だと思ってさ」

耕太が微笑む

そんな二人を見て望が細々とした声で言った

「二人とも、どうして私にそんな優しくしてくれるんですか？今まで私が暮らしてきた所じゃ私なんて邪魔者だったのに、耕太さんと咲紀さんは私が邪魔じゃないんですか？」

今まで心の中で思っていたことを吐き出す望、その言葉を聞き耕太と咲紀が顔を見合わせる

「邪魔……なわけないよね」

「ああ、料理できるし……そういう意味なら咲紀の方が戦力外・

……」

「なにお」

二人の拍子抜けするような返答に望は目を丸くする

「それに最初に言ったじゃん家族なんだから」

「そうそう、家族だし」

「……家族」

耕太と咲紀の当たり前というような言葉に望のつぶやきがこぼれる

幼くして両親を亡くし、不仲だった親戚家に引き取られた望は家族というものに親しみが無かった

……しかし

目の前で笑っている二人はどこか両親を、家族を思い出させるような雰囲気があった。

「……あつ、ありがとうございます」

望は涙を流しながらそう言った

「あゝ耕太、泣かせた」

「うええ！俺かよ」

二人は涙を流す望のそばに寄りそんなことを言いながら笑っていた。

しばらくして泣きやんだ望に耕太が

「まあ、俺達をホントの家族と思って、まずはその敬語やめような」と言つて頭をなでる、その仕草がまるで父親のようで

「いきなり変えるのは難しいかもしれないけど、まあ、ゆっくりやりましょ」

と咲紀が望の肩に手を置く、その優しさがまるで母親のようで

「あの……」

望が控えめに声をあげる

「えと、お願いがあるんで……だけど」

つい敬語がでそうになりながらゆっくり話す

「パパとママって呼んでもいい？」

「……えっ」

「……久しぶりのダブルフリーズだった

「あつえつと、ダメなら全然いいんだけ……」

その悲しそうな声を最後まで聞かずに復帰した咲紀が遮る

「ううん、いいよ、全然平気だよ、ねっ耕太」

「あつ、ああ、うん、いいんじゃないか、その方が家族として親しみやすいだろうし」

焦って耕太も続く

「ホント！ありがとう」

その言葉に望の表情も明るくなる

その様子を微笑んで見ていた二人の心の中では

お兄ちゃん（お姉ちゃん）が来ると思ってたんだけどな

と同時に思っていたりする。

「あらためて、これからよろしくな望」

「よろしく！望ちゃん」

「・・・うん」

「それじゃメシ食べよーぜ」

「よーし食べるぞー」

「もう一つハンバーグを・・・」

そうして3人は笑いあった

## 第9話（後書き）

これで望編が終わりです

次はやつと学校編に入れそうです

自分で読み返して思ったんですけど、あり得ないですよ何ですか  
このなごみぐあいには、こんなのを書いてる自分が恥ずかしい、  
・もつとがんばろう。

と、いうわけで感想、意見、質問、その他お待ちしてます。

## 第10話

・ガサ・ゴソ・ガサガサ

「・・・ふう、まっこんなもんか」

望がやってきてから数日たち、新しい環境にもなれ始めだいが落ち着いた生活になってきていた

そんな日の夜、耕太は自室で明日のために荷物の整理をしていた。

「明日はそんなに必要なものもないだろうし、これでいいだろ」

息を吐き椅子に腰を下ろした。

耕太の部屋は質素なものだった、黒と白のコントラストをベースにした落ち着いた印象を与える部屋で、ベッドにソファ、現代的な真つ白い机と椅子、壁際には棚が2つ並び、漫画や教科書、CDなどがきちんと整理されておかれ、反対の壁には備え付けの大きなクロ―ゼット、後は簡単なオーディオがあるだけのよく言えば質素な、悪く言えば特徴のない部屋だった。

その部屋で耕太がボーっと椅子に座っていると、部屋のドアがノックされた

耕太が視線を向けると、ドアが開き咲妃が顔を覗かせた。

「耕太く何してるの？、見たがってたテレビ始まっちゃうよ？」

咲妃の言葉に耕太は椅子から立ち上がりながら答えた

「明日の準備をちよつと・・・」

「明日？何かあったっけ？」

首を傾げこちらを見る咲妃に耕太は

「お前・・・覚えてないの？」

と、けっこう本気で驚きの表情

「だからなにを？」

本気で覚えていない様子の咲妃に耕太は溜息をついた

（こつちにきてから色々会ったとはいえ、最初の目的ぐらい覚えてるよ・・・）

と、そんなことを思うが声には出さず、それとは別の言葉を一咲妃に言った

「・・・・明日は吉野浦大学付属吉野浦学院高校の入学式だ」

自分が通うはずの高校の長つたらしい正式名称や最後の言葉を処理できずしばらく目をパチクリさせていた咲妃だったが、処理すると同時に叫んだ。

「ああああーーーーー忘れてたーーーーー」

どだだー、とわりかしすごい勢いで耕太の斜め向かいの自分の部屋に飛び込んでいく

部屋の中からはドタバタという物音と

「えと、あの、とりあえず・・・制服！制服はどこだっけ?!」  
焦りまくった咲妃の声が聞こえる。

「.....」

あきれた表情で咲妃のでていった扉を見てみると、こんどは咲妃と

一緒にリビングにいた望が先ほどの咲妃と同じように顔をのぞかせた。

「パパ、ママどうしたの？」  
とかわいく首をかしげる。

「ああ、明日のこと、すっかり忘れてたらしい」と、望の言葉に少し戸惑いながら答える耕太。

戸惑ったのは咲妃のボケでも望の可愛さでもなく、その呼び方にだ、あれから何日か経ったがまだ馴れない。  
しかし慣れきらないものの最初に比べれば抵抗もなくなり、少しずつ愛着がわいてきたのも確かだ。

「望はもう明日の準備終わったのか？」

「うん、それはもう終わったけど…」

と、望はそこで言いよんだ。

「どうした？」

望はゆっくりと続ける。

「ええと…その…学校が…」

そこまで聞いて、耕太は望が言おうとしていることを察した。

「大丈夫だよ」

耕太はそう言って望の頭をなでた

聞かなくてもわかる、この子は不安なんだと

「不安がることないさ、いつも通りのそのままの望でいればいいん

だよ」

これから、初めての、知り合いの一人もいないところに行くのが…

「望は良い子だから、いつも通りにしてれば友達なんかすぐできるさ」

だったら、安心させるのが親父のつとめだろ？

耕太の言葉にしばらく聞き入っていた望だったが、やがて

「…うん！」

と満面の笑顔でうなずいた

その純粋な笑顔に耕太も笑顔を返しもう一度望の頭をなでた  
その姿は、本当に仲のよい親子にしか見えなかった。

「さて、テレビ見ようか？」

「うん」

二人が並んでテレビを見ている時咲妃の部屋からは

「うえ〜ん、カバンどこにしまったっけ〜、靴下はどこお〜」

とか言う、声が聞こえたが親子の団らんムードではのぼのぼする二人の耳には入らなかった

## 第10話（後書き）

お久しぶりです。

更新頑張ろうとは思っているのですが、最近さらに忙しくなってしまうまして……

そんな作者の作品でも応援してくださる読者の皆さんには感謝しமாகりです。

感想・メッセージがあれば元気が出ますので、どうぞ遠慮せず送って下さい

## 第10・5話

・・・明日から学校

さっきまでは、そう思っただけで胸が重苦しくなっていたのに今はもう何ともない。

「・・・パパのおかげかな」

一人の寝室でベッド横になりながら望は静かに呟いた

先ほどの耕太の頭ナデナデは望に驚くほどの安らぎを与えていた

『そのままで・・・望はいい子だから』・・・か、そんなことはじめて言われたな。

望の人生でこんなに幸せに感じる時間は初めてだった、望自身を見てもらえることさえ無かったのに耕太は望を見て、そのままの望がいいと言ってくれた、それがとても嬉しかった、それに頭をなでてくれた手は温かく優しくかった

「パパに・・・ママ」

望は自分に幸せな時間と場所を与えてくれた二人の事を思う

パパとママに初めて会ったときはびっくりしたな、どっちもすごい  
かつこよくてキレイなんだもん。

最初はそんな人たちの前ですごく緊張してた、でも話をしたり買い  
物したり歓迎会を開いてくれたりしてすごく優しい人たちなんだ  
って分かった。

パパの料理はすごいおいしかった、ハンバーグは今まで食べた何  
よりもおいしくて、なんでか暖かい味がした、ママは料理はダメだ  
けどとっても優しくかった、ママが喜ぶと私まで嬉しくなってしまう  
そんな不思議な笑顔の人だ。

パパもママも笑った顔がすごい優しくそうでした、そんな  
風に笑った顔がなぜか死んだほんとうのパパとママに重なって見え  
て、それでこの人たちと家族になりたいって思った。

「ふふっ……」

ベッドの上、望は小さく笑う

これからは3人で暮らしていける、優しいママかつこいパパと、  
そう思っただけで笑いがこぼれる

こんなにいい両親は他にいないんじゃないかな？

友達ができたら自慢できるかもしれない

望に学校への不安はもう無い、望は自分にやってきた幸せを思いな  
がら眠りについた。

「……眠ったか？」

「うん」

望が眠ってしばらくして耕太と咲妃が部屋のドアを開けた

「学校のこと心配してたから不安で寝れないんじゃないとおもったけど大丈夫そうだな」

「耕太が励ましたんでしょ？なら大丈夫に決まってるよ」

「そりやまたなんで？」

咲妃が満面の笑みで言った

「だって、パパだもの」

「なんだそりや」

「まあとりあえずこの寝顔見たら心配も吹っ飛んだでしょ？」

「そうだな」

二人はドアを閉め、自分の部屋に歩いていく

「そういえば、明日の準備は終わったのか？」

その途中で耕太が何気なく聞いた

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・？」

咲妃からの返事がない、しばらく不思議に思ったがすぐ合点がいった

「終わってないんだな」

「・・・・・・・・・・はい」

咲妃は消え入りそうな声でそう言った、そして

「だってね、だってね制服とね鞆とね靴とね校章と書類を別々のダンボールにしまっちゃったみたいでね、どれがどこにあるのか分かんないの」

と、じたばた騒いだ

「分かんないじゃない探さない、それとあんまりおっきい声出さな望が起きちゃうだろ」

「ううーだって」

耕太に言われて小さい声で口をとがらせる

「まあ、まだ時間あるしがんばれ」

「ええ！手伝つてくれないの！！」

「当たり前だ！」

と二人はけっこう大きな声で喋る

「ええゝなんでえゝ一人じゃ大変なんだよー」

と咲妃は言うが、耕太としては年の近い女の子の服やらなにやらが詰まった箱を漁るなんて気恥ずかしくてできるものじゃない。

「・・・とにかく、俺は寝る」

とさっさと部屋に入ってしまう

「耕太のケチ、手伝ってくれてもいいじゃん」

と、言いつつ咲妃も自分の部屋に戻っていく。

その後、準備に四苦八苦しあまりにも騒がしい咲妃を、結局耕太が手伝うことになったのはまた別のお話。

## 第10・5話（後書き）

さあ、いよいよ次回から学校です。

前置き長っ！！とかっつまないでください、学園ラブコメじゃねーの！？っていうのも無しでσ（＾　＾　；）

読者さんの人気が高かった望の主役話です、後半はいつも通りでした。が・・・感想・意見あれば送ってください

## 第11話

「よし、行こうか」

黒を基調とし胸元に金の刺繍の入ったスクールブレザーに身を包んだ耕太が玄関のドアを開ける

「楽しみだなー」

それに、上着は同系色だが襟や袖口に装飾が入り女の子らしくなったものに、青系統のチェック模様のスカートをはいた咲妃が続く。

「ドキドキする・・・かも」

と咲妃の後にでてきたのは咲妃の着ているものに近いが、細部の装飾が異なり子供らしくかわいらしくなったものを着ている望。

「望ちゃん、制服似合ってるね」

「そっそんな・・・、ママの方が似合ってるよ、ねっパパ？」

と咲妃と望が言い合っていると先にエレベーター耕太が二人を振り返って言った

「二人ともよく似合ってるよ、エレベーターきてるから早く行こう」  
その声にまだ玄関に立っていた二人が耕太の元に走る。

三人でエレベーターに乗り込み1階までおりる

と、そこにはきっちりとしたスーツに身を包んだ美人、そのまま社長椅子に座っていても違和感のないほどにブランドスーツを着こなす大人の女性、このマンションの管理人、たまみやまい珠宮舞がそこにいた。

「よー、おはよう」

かるく手をあげて管理人の舞は二人に挨拶した

予想外の美人の登場に少し動揺しながら耕太が声をかけた

「おはようございます舞さん、どうしたんですか？その格好？」

「どうもこうもあるかいな、今日入学式やる？ウチいちよう保護者代理やし、大体おまえら学校の場合知らんやろ」

「・・・あっ」

舞の言葉に全員がそろってそう言えばの表情だ

「やっぱりなー、待っとつてよかったわ・・・耕太」

「ハイ!!」

いきなり舞に名前を呼ばれビクツとする耕太、初対面の印象がまだ濃く残っているからだろう

「アンタは男なんやからキチンと女のめんどろ見なあかんやろ、しつかりしいや」

「・・・・・・・・はい」

たしかにその通りだ、昨日咲妃に偉そうに言っておいてこれでは面目が立たない、耕太が少しだけ肩をおとす。

しかし

「まあ、来たばつかでいろいろ忙しかったやろっし、このぐらいは気にせんでもええよ」

と、舞が優しく耕太の肩をたたいた、初対面の時の印象とのギャップに耕太が驚き顔を上げる

後ろで咲妃と望も目を丸くしている（最もこの二人の驚きには耕太にそんな行為をしていることに対する感情も含まれているが）

「・・・・・・・・あ、あの、舞さん」

「おお、どうしたん？そんなに驚いた顔して」

舞が3人を見て首を傾げる

「いや、あのなんだか舞さんイメージと違うなあって思って」

と咲妃が答える

「失礼やなあウチはホントは優しくて頼りになる管理人のお姉さんなんやで、まあ、最初的时候はおまえらのオヤジからいきなりわけわからんこと言われて機嫌が悪かったさかいあないなこといってもうたけどな」

と最後の方は少し照れくさそうに舞が答える

こうしてみると本当にいいお姉さんといった感じだ、耕太達の中で舞の印象が書きかえられた

「学校まで送ってくれるんですか？」

場が和んだところで咲妃が舞に問いかけた

「おう、ウチのマイカーでな」

と舞は自慢げに後ろの真っ赤なスポーツカーを指さした

「さあはよ乗りな、遅刻してまうで」

「それじゃお願いします」

舞にうながされ耕太達は車に乗り込んだ

耕太が助手席に座り逆側のドアから舞が乗り込む

「ほな、いくで」

そうして、耕太達は学校へ出発した

耕太達を通う吉野浦大学付属吉野浦学院高校はマンションからほんの2、3キロの所にあった、舞の車でたった5分で着いてしまった。大学付属というだけあってかなりの大きさがあった、隣に併設された大学、中学、小学校まで含めれば東京ドーム何個分にもなるだろう、高校の校舎は4階建ての1年棟、6階建ての2、3年棟に分かれており、その他二つの体育館と武道館などを抱えている。

その中の第一体育館脇の駐車場に車を止め4人が車を降り昇降口へ向かう、小学校の始業式は入学式終了後の午後かららしく望と二人で咲妃と耕太の式を見ていくそうだ。

「・・・・・・・・それにしても」

耕太がポツリと漏らす

「ん？どうしたの？」

その声を聞き咲妃が耕太に声をかける

「・・・・・・・・イヤ、何でもない」

「??？」

言うべきか悩んだが言うべきではないと耕太は判断した

周りからの視線が気になることを

3人の美少女、美少女、美女だ注目を引かないはずがない、先ほどから男子生徒の熱っぽい視線と自分に対する嫉妬の視線がすごい、が、わざわざそれを伝えて心配させることもないだろうと耕太は考えたのだった。

しかし

耕太は気付いていなかった注目を集めていたのは3人だけではないことに

4人目の美少年が女子生徒や女教師さらに入学式に来ている奥様方の視線まで集めていることに。

ただ一人自分たちに向けられる視線にも耕太に向けられる視線にも、耕太の鈍感さにも気付いた舞は小さく笑って。

「まだまだ子供やなあ」と呟いた。

## 第11話（後書き）

やっと更新再開する事ができました

本当に長いことお待たせしました読者の方々申し訳ありません。  
応援してくれたみなさん本当にありがとうございます。

しっかり頑張りますので見捨てないでくださいね（切実）

## 第12話

吉野浦大学付属教育機関

大学、高校のみならず中学校、小学校、幼稚園までもかかえる巨大な施設で、国内でも有数の規模を持った大学として知られている、その広大な敷地面積により幼稚園からずっとそこにいるものでさえ、迷ってしまうことがあるそうだ。

そんな広大な敷地の一角、高等部の一学年昇降口の前には新入生のクラス分けが大きく張り出されている。

耕太一行は4人で連れ立ってそこにきていた、相変わらず周りの注目を集めながら。

「あつ耕太！あれクラス分けでしょ？」

咲妃が声を上げる

「ああ、そうだろうな」

「ううゝ緊張してきたかも」

「子供じゃあるまいし・・・」

と咲妃に返した耕太の顔にも少しかりの緊張がみてとれる

「ほらポケーつとしとつてもしゃーない、さつさと見てこよーや」  
と言つて舞が大きな掲示板に向かって歩いていく

「ああゝ心の準備が」

と言いつつも咲妃たちもそのあとに続く

望は舞と手をつなぎ、トテトテと舞の隣を歩いている。

その美形4人に、というか先頭を歩く舞の姿に押されるように掲示板前の人垣が割れていく。

「うわお、すつげえ美人」

「モデルさんとかかな？」

「すっごーい！足キレイ」

「ヤバッ、あの子マジかつこいいー！」

「髪さらさら、どうやったらあんなふうになるんだろ？」

「一緒にいる子もヤバッ、今年の一年はレベル高いな」

「あのちっちゃい子カワイ」

周りからいろいろな声が聞こえてくるが4人は気にせず歩いていく  
耕太だけは微妙に顔を赤らめながら歩いていく

そんなふうに着目を感じつつ掲示板の前までたどり着いた

「ええーっと、私のクラスは……」

咲妃が目を走らせ耕太も自分の名前を探す

そして

「……あつたー！」

「こっちも見つけた」

ほぼ同時に自分の名前を発見し声を上げた

「……んで、なん組やった？」

舞の問いかけに対して2人が同時に口をひらく

『1年3組』

二人の声がかさなった

そのことに2人は顔を見合わせた

耕太はやっぱりかといったかんに

咲妃は嬉しそうな笑顔を浮かべて

「2人とも一緒のクラスか、まあよかったんやないか？お互いほかに知り合いもおらんのか？」

「まあ、こうなる気はしてましたよ……なんていうか、王

道？」

と、耕太

「私は嬉しいよ、舞さんの言うとおり知り合いじゃないし」  
笑顔で言う咲妃に耕太も

「まあな」

と、うなずいて返す

「そんじゃ、クラスわかったし先に体育館行ってるで」  
舞が望の手をひいて歩いていく

2人の後ろ姿を見ていた耕太が口を開く

「オレたちも行こうか」

「うん」

多くの学校がそうであるようにこの高校もはじめにホームルームをおこないその後入学式という流れをとっているそのため耕太たちは教室に行くため昇降口に向けて歩き出した

## 第12話（後書き）

大変長らくお待たせ致しました、更新出来なかつことを深くお詫び申しますm（――）m 長い間止まってしまっていたこの作品に感想・評価を送ってくださった皆様、本当に感謝しております  
今後ともよろしく願います。

### 第13話

2人の所属する1年3組は校舎の最上階の5階にあった  
1年の教室が一番上にあることが多いのはなぜだろう？  
などと思いながら耕太たちは階段をのぼった

教室の前に立ち耕太が横開きの扉を開ける

耕太たちは後続組だったらしく教室の座席はほとんど埋まっていた。  
教室に入り教室を見渡す

教室中の男子の視線が耕太の隣にそそがれているのは気のせいではないだろう

同時に耕太に嫉妬の視線が注がれているのに耕太は辟易する。

隣にいる視線を集めてる本人は気付いてないんだろう

数日過ごしたただけが彼には理解はできた彼女は軽く天然で鈍感だ。

とそんな思考をし溜息をはく耕太だが彼も自分に嫉妬以外の視線が集まっているのに気がつかないあたり人のことを言えない。

「ねえ、なか入ろうよ」

と咲妃が耕太に声をかける

「ん、ああそうだな」

軽く頷き教室に足を踏み入れる、が、入ったはいいがどうするべきか迷う、席に座った方がいいのだろうがどこに座るべきか・・・と耕太が視線をまわしていると。

「黒板、座席表はつてあるわよ」

と、声をかけられた  
耕太がそちらに視線を向けると

「前、前」

と黒板を指さしているショートカットの女の子がいた。

「どーも」

と軽く声をかけて黒板に2人が向かう

黒板の真ん中には四隅を磁石で止められた紙が張られていた  
さつき少女が言ったように座席表なのだろう

2人がそれをのぞき込み自分の席を探す

どうやら教室の左側に女子20人、右側に男子20人がアイウエオ  
順に並べられているようだ

それでいくと『岸崎耕太』は男子の5番目『星村咲妃』は女子の1  
8番目

座席を男女あわせて6列に並べると耕太は中央の右側の列の5番目、  
咲妃は中央の左の列の5番目  
つまりこうなる

| 女子 |   |   |   |  | 男子 |   |   |   |   |
|----|---|---|---|--|----|---|---|---|---|
| 1  | 7 |   |   |  | 1  | 4 |   |   |   |
|    |   | 1 | 5 |  |    |   |   |   | 8 |
| 2  | 8 | 1 | 5 |  | 2  |   |   |   |   |
| 3  | 9 | 1 | 6 |  | 3  |   | 1 | 0 |   |
| 4  | 1 | 0 |   |  | 4  |   | 1 | 1 |   |
| 5  | 1 | 1 |   |  | 5  |   | 1 | 2 |   |
|    |   |   |   |  |    |   |   |   | 9 |
|    |   |   |   |  |    |   |   |   | 1 |
|    |   |   |   |  |    |   |   |   | 7 |
|    |   |   |   |  |    |   |   |   | 1 |
|    |   |   |   |  |    |   |   |   | 6 |

|   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|
| 6 | 1 | 1 | 6 | 1 | 2 |
|   | 2 | 9 |   | 3 |   |
| 1 |   | 0 | 7 | 1 |   |
| 3 |   |   |   | 4 |   |
|   |   |   |   |   | 0 |

「・・・・・・・・隣だな」

「・・・・・・・・隣だねえ」

耕太は溜息をつき、咲妃は嬉しそうな顔をしている  
唯一の知り合いがすぐ近くにるのは安心できるからだろう  
だが・・・

「ここまで来るともう偶然とは思えん」

耕太は釈然としない面もちでもう一度溜息について自分の席に向か  
った。

耕太が咲妃と並んで席に着くが時間にはまだ余裕がある、時間をど  
うやって潰そうかと考えていると隣から声をかけられた、咲妃のい  
る左からではなく右から

「なあ、ちよつといいか」

見ると180ほどもある長身に短めの髪をし硬派な感じのいかにも  
スポーツ青年な細目の男と、165くらいの眼鏡をかけた男が立っ  
ていた。

「なに？」

「ちょっと聞きたいことがあるんだが、いいか？」

長身の男の言葉に何だろうと思いつつも頷く耕太

「あゝ、ここだとアレだからちょっと向こうで話さないか？」

「？別にいいけど」

立ち上がり行こうとする咲妃がなんだか『一人にしないで』と言いたげな視線を向けた

そんな咲妃に耕太は、んじゃ行ってくる、と手を振り2人に付いていった

残された咲妃は裏切られたような表情をして机に沈んだ。

2人に耕太がつれてこられたのは男子側の教室の端端と言っても耕太の席から数メートルしか変わらないが

「悪いね、いきなり」

「いや、べつにかまわんよ」

「そっか、サンキュ、っと俺は高槻たかつき夕、まあ気軽にユウって呼んでくれよ」

眼鏡をかけた男が言い

「石見八雲いわみやくもだ、石を見ると書いて石見、八つの雲で八雲と言う、よろしくな」

硬派な感じの少年が続けた

「俺は岸崎耕太、よろしく」

2人と握手をする

「岸崎耕太ね、なあなあ、こーたポンって呼んでいい？」

「……ポンはやめてくれ」

「そっかそれじゃ耕太って呼ぶわ」

独特のペースにのまれて耕太がリアクションをとれないでいるといつの間にか隣に来ていた八雲が耕太の肩にポンと手を乗せた

「気にするな岸崎、あいつなりのコミュニケーションだ、俺も最初はやクモンなんて呼ばれた」

「……ありがとう八雲、それと俺のことは耕太でいいよ」

この2人はたぶんユウのゆるいボケと八雲のクールなツツコミで成り立っているんだろう

「んでね、話なんだけど……」

先ほどまでゆるんだ笑顔だったユウが不意に真顔になって言ったいきなりの変化に耕太は空気が重くなったような錯覚を覚えた

「耕太さぁ……、朝見たんだけど、四人でいたよね？」

「……ああ」

「さっき一緒に入ってきた子と小学生くらいの子とキャリアウーマンみたいな人と……」

そこまで言ってユウは確認の視線を耕太に向け、耕太もそれにぎこちなく頷いてみせる

それを見たユウは八雲と視線を交わしお互い頷きあってから続けた

「聞きたいことってのはそれに関する事なんだけどね……………」

「

……………」

耕太としばらく無言で見つめ合い、やがてユウはためらうようにゆつくりと口を開き言った

「ぶつちやけダレが本命？」

「……………はい？」

ユウの言葉に耕太が返せたのはこれだけである

しかし、真面目な空気だったのにいきなり顔をゆるませてそんなことを言われればそうなるのも分かる

耕太を啞然とさせている張本人のユウはニヤニヤと耕太の反応を見ている

気のせいかな八雲の顔もにやけている気がする、つか絶対にやけてる

「…………ど、どういう意味だ」

「そのまんまの意味だよ、あんなカワイイ同級生＆キレイなお姉さ

ま&愛らしい女の子はべらせといてなにを言ってるかこの色男が」

「俺的には一緒に来たあの子が怪しいと思うがな」

硬派な感じのあった八雲までそんなことを言っただけで咲妃の方を指さしている

それにつられてそっちの方を見ると2人の女の子と話している咲妃が耕太の目に入った

すると唐突に振り向いた咲妃と目が合った

さっきまでのユウや八雲の言葉のせいで何となく気恥ずかしくなったのか耕太は視線をはずす

耕太のそんな反応を見た2人はニヤニヤしながら耕太を見る

「見た見た？あの反応」

「コレは間違いないな」

コレには耕太も反論した

「まで！俺と咲妃とはそんなんじゃない、ただの親戚だ遠くから来たからお互い知り合いがない、だから一緒に来ただけでそういう関係じゃない」

コレは昨日のうちに考えておいた設定だ、咲妃にも同じように言っているさすがに赤の他人と一緒にいたら変に思われると考えるの配慮だ、ちなみに望も同じである

耕太の説明を聞き2人はふーんと頷いた

「親戚さんか、遠くからこっちに来たんだって？」

「ああ、今朝一緒にいた子も咲妃の方の親戚でな、みんなこっちの

方は初めてだから親父の知り合いの舞さん・・・今朝いた人に一緒に来てもらったわけ」

「へーなるほどね、遠くから来たってことは耕太って一人暮らしか？」

なにげない八雲の質問に内心ドキリとしながらも耕太は普段通りに言葉を返す

「ああ、そうだよ」

「どこに住んでんの？」

この質問にさらに心拍数を跳ね上げる耕太だったが、ウソを言ったとしてもそれがばれたときにはもつとまずいことになると判断した耕太は素直に話すことにした

「すぐ近く、ここから車で十分もかかんないよ、大通りの方のスーパーの近くのマンション分かる？あれ」

「ああゝあれか、ずいぶんいいところ住んでんのな」

「すごいな、耕太は金持ちか」

「いやいや、さっき言った舞さんが親父の知り合いだから安くしてもらってるだけだよ」

実際には耕太の父親は一般会社員の平均年給以上は稼いでいるが、金持ちと言われるとなんだか違和感があるようだ

「ふーん、そっかあ、そうだ耕太今日遊びに行ってもいいか？一人暮らしって興味あるんだよね」

またまたはねあがる心臓をおさえ、必死に平静を装い言い訳を考える

「い、いや、まだ片づけとか終わってないから………っかいきなり初対面のヤツの家に行くか？」

「な〜に言ってるんだよ、自己紹介&握手したらもう友達だろうよ？」

「ふむ、そうだな……。まさか耕太は俺達を友達だと思ってくれないのか？」

耕太は言葉が出なかった

別に友達と思ってないわけではなかったが、合ったばかりだったし気が引けていた面もあった、しかしこの2人は自然に耕太を友達だと言った、そんなことをストレートに言える新しい友人に耕太は二カッと遠慮のない笑顔を浮かべた

「んなわけないだろう、友人一号、二号」

「おおっと、一号はひどくないかあ〜耕太ポン」

「む、俺が二号か」

2人も笑って返してくれる、耕太の学園で最初の友人だった

「よし、ということで今日は耕太のうちに入学記念パーティーでもやるー」

「なにがということ、なんだよ、ダメだったの」

「ええええー」

「さつきも断られただろうに学習能力がないな、バカめ」

「ヒドッ！八雲よそれはひどいんでないかい？」

「いや、八雲の言うとおりだな」

「耕太まで！クッ俺に味方は居ないのかあ！」

と、仲良くなった三人は教師が来るまでぎゃーぎゃーと騒いでいましたとさ



### 第13話（後書き）

うーんうまくいかない、どうも話がまとまってませんね

皆様大変お待たせいたしました、13話ですユウ君と八雲君の登場です、いかがでしょうか？

ご意見感想お待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6681b/>

---

Love is People

2011年8月5日01時00分発行